

|| 編 || 集 || 後 || 記 ||

旭川医科大学研究フォーラムも創刊後5年（vol.6）となり、掲載内容や目的をあらためて問い直す時期に入ってきていると思われる。専門の研究論文はそれぞれの分野の学術誌に発表されるべきことはもちろんであるが、本フォーラム誌では、教官のみならず研究生や大学院生など若手に論文発表の場を提供し（刊行目的参照）、彼らを刺激しその鍛錬の場を提供する意義もあろう。最近急速にそして劇的に大学とそれを取り巻く環境が変化している。カリキュラム改革、大学院改革、入試改革、組織改変、診療体制改革などが毎年進行している。その重みと速度はさらに今後増していくであろう。そのような改革の内容と成果について、意見を述べ合う場を持つこともきわめて重要であり、本誌をそのような場として活用することができれば有意義であろうと、個人的には思う。さまざまな改革を推進している教官の意見と成果が、それぞれ一つにまとまった高いレベルの論文となりこのような場に発表され意見交換がなされ、本学の発展に寄与されんことを願う。

表紙解説

夜空にぼっかりと浮かんでいる月。当たり前のように太陽の光を照り返して、満ち欠けを繰り返している月。月の成因説には、兄弟説（地球と月がほぼ同時に近い領域でできた）、親子説（遠心力により地球から月がちぎれた）、他人説（地球から遠く離れた場所で誕生した月が、地球近くを移動中に地球の重力にとらえられた）などいくつかが考えられてきました。しかし、アポロ宇宙船が持ち帰った月の石の組成研究から、現在最も有力なのが、ジャイアントインパクト説です。数十億年前に火星大の原始惑星が地球に衝突して飛び散ったマントルが地球の周りで固まり、月になったと説明されています。

仮にこの原始惑星の軌道がちょっとでもずれ、月が誕生していなかったら現在の地球はどのようなになっていたでしょう。ある専門書によると、月のない地球では、潮汐による摩擦がなく、いまよりずっと速い自転のため強風が吹き荒れ、生命にとっては過酷な環境であることから、進化のスピードもずっと遅くなっていたようです。太陰暦も生まれなかったでしょう。地球の自転はおよそ8時間ほどであり、生物の現在のライフサイクルとは大きく異なったものになったと想像されます。そう考えてみると、そもそも、人間そのものが誕生していたかという疑問も生じてきます。

そのような視点から「月」を考えたとき、「月のある地球上で、今を生きている私たち」は、その存在に感謝せずにはいられません。

この二つの惑星衝突による飛沫を描いていると、何処からともなく湧出した symbolic character 群（講座名）が衝突境界面を超えて突き進んでいく姿。

それはまさに、地球生命の誕生を予感させるものでした。

整形外科学講座 今井 充